



デンマークに 学ぶ「豊かさ」を 創造する力

脇坂敦史 | 構成

世界一幸福な国とも言われ、経済から人の暮らし方、食、デザインなどさまざまな領域で注目を集めるデンマーク。その「豊かさ」を育む力はどこからくるのか。コペンハーゲンにある新しいデザインスクール兼研究機関で、その独自の取り組みから世界の注目を集める CIID (Copenhagen Institute of Interaction Design) と、人間中心のまちづくりで時代をリードする世界的都市デザイン事務所ゲール (G&E) の2カ所を訪問し、担当者にそれぞれお話を伺った。

デザイン思考が もたらす 豊かな教育と ものづくり

CIID
Copenhagen
Institute of
Interaction
Design

対談

所在地：
コペンハーゲン、デンマーク
概要：
インタラクションデザインに特化した調査・研究機関。2006年創立の新しいデザインスクールながら、世界のベストデザインスクール25 (2012年) にも選ばれている。
URL：
<http://ciid.dk/>

池永寛明
Kenaga Hiroaki

【大阪ガス株式会社エネルギー文化研究所所長】



シモーナ・マスキ
Simona Maschi

【Copenhagen Institute of Interaction Design 共同創業者兼 CMO】

多様なバックグラウンドをもった学生たち

池永 私たちは日本の過去と未来をつなげ、外からも学びながら新しいものを創造するために「ルネッセ」と名付けた活動を展開しています。ここ CIID で実践されているデザイン思考には、たんなるものづくりの理論であることを超え、過去のものづくりと共通するような哲学があり、新しい時代に適応するためのヒントが多くあるように感じます。CIID は過去の何を学び、どのように新しい価値を生み出そうとしているのか？ それを、ぜひ知りたいのです。

マスク CIID は2006年に創立されたインタラクティブデザインに特化した調査・研究機関であり、学校でもあります。ですから、私たちはデザインをするだけではなく、デザインそのものの考え方を追求したいと思っています。ここでいうデザインとは、人間の生活というものを中心においたイノベーションであり、ご指摘の通り、それは過去のものづくりとも深くつながっていると

思います。
池永 創造的で魅力的なプログラムに惹かれ、日本を含めてさまざまな国から優秀な学生たちが集まっていますね。

マスク 3階建ての建物の1階部分が学校ですが、昨年も世界中から200名近い応募がありました。このうち、私たちは毎年24名の学生を選びます。けれども私たちは、能力が優れた学生を上から選ぶようなことはしません。選考過程においては、チームとして何ができるかを最も重視するのです。

池永 あえてバックグラウンドの違う学生を採用しているのですか？
マスク その通りです。国籍や性別はもちろん、なるべく違う教育を受けた人を選んでいきます。もちろん芸術的な素養をもったデザイン専攻の学生もおられますが、半分くらいは技術系の学生です。

池永 それほど多様性をもった学生たちが、どのように学んでいくのでしょうか？

マスク 私たちは、「考えながら学ぶ」ということを大切にしています。そのため、チームをつくらせていくことが大切です。ここにいる人たちはみな英語を話しますが、北欧訛り、イタリア訛り、インド訛り、中国訛りなど、癖のある英語が飛び交っていますよ。けれどもその英語より、ものづくりにおける「プロトタイプ」それ自体が、最も重要な共通言語となるのです。

池永 デザイン思考では、アイデアを素早くモノの形にすることを大



CIDで行われている授業の風景。学生たちが自ら作成したプロトタイプをもとに毎週発表を行う。

学びながら実践する場所

リア人は、これが苦手です(笑)。けれども、それぞれの国の文化がぶつかり合うのではなく、チームのなかで「文化を育てる」という考え方を大切にしています。もちろん口で言うほど簡単なことはありませんが。

池永 企業や自治体などともコラボレーションを積極的にしながら、実践的なデザインを学べるのも強みだと感じました。CIDは教育だけでなく、コンサルティングやリサーチといった事業も積極的に取り組んでいますね。

マスク 建物の2階には12名のコンサルタントがいて、民間と公共のさまざまな組織をサポートしています。CID代表のヤコブ・リース(Jacob Reiss)はかつてデンマークのグローバル製薬企業であるノボノルディスクのマーケティング・ディレクターとして、日本にも3年間滞在していた経験があります。そうしたネットワークを生かし、ノボノルディスクと糖尿病関連のプロジェクトを行ったり、トヨタやソニーといった日本の大企業とも仕事をさせてもらいました。ほかにも、航空会社のルフトハンザと協力してファーストクラスの客室プロトタイプを作成しながら乗客の体験を詳細に調査

したり、APC(シュナイダーエレクトリック社)とは、都市のインフラに関連するプロジェクトを共同で行ったりもしているのです。

池永 CID独自のビジネスも展開していると聞きました。マスク ちょうどこの建物の3階に、私たちが「インキュベーター」と呼んでいる機能をもつ場所があります。CIDのなかでビジネスにつながるようなアイデアが浮かんだとき、それを1年かけて育てていくのです。

池永 たとえば、どんな事業を考えているのですか？
マスク 今取り組んでいるもののひとつに、「血液リンク」と呼んでいるものがあります。近年、南アジアや南アメリカを中心に血液などの国際的な闇取引が盛んに行われており、「レッドマーケット」として国際問題化しています。血液を提供する側とされる側をどのようにつなぎ、その関係を透明なものにできるか？
Airbnbが宿の提供で、**Uber**が移動手段の提供で行ってきた役割とも大いに共通した部分があります。これが輸血という命にかかわる大切な行為に特化したスタートアップ事業といえるでしょう。ほかにも、貧困に苦しむアフリカ大陸などを対象に、携帯電話を使った電力の売買といった事業も考えています。これまで述べてきたさまざまな事例は、

すべて私たちが考えるデザイン理論を実践に移したものです。この建物の中にある約40カ国からやってきた人たちは、学びながらつねに新しいものを生み出し続けているのです。

現代の「守破離」としてデザイン思考を生かす

池永 刺激的なお話を伺いながら、私は葛飾北斎というヨーロッパでも人気のある日本の画家について考えていました。北斎はまず日本の伝統的な版画で修業を始め、その後西洋画を学び、最後はまた伝統的な絵画へと戻っていききました。日本ではこういった学びの過程を、「守破離」という言葉で表現するのです。まずは型を守るところから修業を始め、よりよい新しいものを学び型を破る。最終的には型から離れ、自らのスタイルをつくる。プロトタイプをつくりながら新しいものを生み出していくデザイン思考は、ひじょうに現代的な形でそれを実践しているように思えました。

マスク 日本だけでなく、ヨーロッパを含めた世界中が同じ変化を経験してきたのだと思います。産業革命より前の時代には、イノベーションという言葉はあまり重視されなかったと思います。なぜかといえば、たとえば新しいベッドやテーブルが必要だったとしましょう。誰かに来て

もらい、部屋を見てもらい、寸法や素材を決めてつくってもらおう。同じように、毎日さまざまな課題に挑戦し、解決のために問題を分析し、何かを創造していたのです。それは今、私たちがやろうとしているデザイン思考と同じです。ところが時代とともに機械のロジックが勝つてしまい、私のテーブルとあなたのテーブルがまったく同じものになってしまった。テーブルを必要とする人と、テーブルをつくる人との距離もどんどん離れていく……。

池永 日本でも、ものづくりの現場において、供給(サプライ)側の論理になりがちで、お客さまが見えにくくなっていると感じます。

マスク 産業の内部でも研究開発をする人、技術をもっている人、マーケティングをやる人と分かれてしまった。けれども、これからの時代は大きな会社で上司の指示を待たな



CIDでの対談風景。日本ではなじみのない数々の取り組みに驚かされる。

くても個人としてやりたいことを実現させていくような、新しい事業が つぎつぎと生まれてくるでしょう。個人的な考えとして、私はアイディアというものが何かを「目覚めさせること」であると考えています。大企業のような組織では、まず大きな計画があり、そこにイノベーションを求める。けれども、イノベーションは必ず新しいプラットフォームを必要としていて、そこで初めて実現するものなのです。

池永 ご指摘のようにイノベーションはむしろ日常的な営みとなり、大企業が押しつける新しい潮流のようなものではなくなるのかもしれない。でも、たとえばスマートフォンのわからないことを手軽に検索できるのはよいことですが、「考える」時間が減ってしまうのは問題だと感じています。先ほどマスクさんがおっしゃったように、物事はステップを踏みながら進んでいくもの。それがブラックボックス化されてしまい、途中の段階が見えにくくなっている。マスク その通りですね。

池永 それだけが理由かどうかはわかりませんが、もともと日本人は新しいもの、異なるものを外部から取り入れて自らのものとする「翻訳」「編集」機能が得意だったはずなのですが、それができなくなっていると感じています。本来はもっと文化

という要素が必要なのに、技術屋ばかりでものづくりを議論していると、現実から遊離してしまう。

マスク 完全に同意します。以前、品質管理に関係する日本のある組織と仕事をすることがあるのですが、小さなミスひとつ許さず、完璧な動作を求める強迫観念に驚いたことがあります。製品であれサービスであれ、人と社会のためにつくるもの。そして、人も社会も毎日のように変化していくはずなのですが。

池永 多様な人間がコミュニケーションをとりながら、新しい価値をつくる。CIDのような学校が日本にも必要だと感じます。おそらくそれは、先ほど述べた「守破離」のような日本独自のデザイン思考が再び目覚めるきっかけとなるはず。人や文化ではなく、技術偏重でやってきた日本は今、ターニングポイントに来ていると思うのです。

マスク 世界中のさまざまな企業と仕事をしてきましたが、日本には大きなアドバンテージがあると感じます。それは日本文化や組織のなかにある秩序と規律、そして優雅な美意識のあいだにある絶妙なバランスです。これからも人や集団が仕事をすると、それは必ず素晴らしい方向に作用すると思います。

池永 復古主義ではなく、過去から受け継がれる「本質」に新しい情報

を加えながら価値をつくっていくことが重要ですね。

マスク 以前から行われていたやり方に加え、今はデジタル技術があり、それをもってあらゆる人たちがつながり合うことができます。それは、世界中の人々にとってポジティブなチャンスではないでしょうか。

池永 それこそ、まさに新しい時代の「守破離」だと思えます。人の話に耳を傾けるといことからスタートするこの学校のカリキュラムと同様、出発点はやはり人なのだと感じました。デンマークの教育やものづくりの基本には、それがあって感じずにはいられません。本日は本当にどうもありがとうございました。



シモーナ・マスク
Shiori Masaki

Openhagen Institute of Interaction Design 共同創立者兼CEO。ミラノ工科大学博士課程修了。博士(企業デザイン、マルチメディア・コミュニケーション)。元インタラクシオン・デザイン・インスティテュート・イブリア准教授。2006年のCID創立以降、全チームを率いる一方、世界中で精力的に講演活動も行っている。



池永寛明
いけなが ひろあき

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所所長。1959年、大阪市生まれ。82年大阪ガス入社後、天然ガス転換部にて人事勤務、営業部門にてマーケティングに携わる。日本ガス協会にて企画部長として、エネルギー・環境制度設計対応を担務。大阪ガス帰社後、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年より現職。